

2005年4月26日

東京シューレによる「貴戸理恵著『不登校は終わらない』に対する見解」へのコメント

貴戸 理恵

特定非営利活動法人東京シューレのホームページ上に「貴戸理恵著『不登校は終わらない』に対する見解」(<http://www.shure.or.jp/info/kenkai.html>)とする文書が掲載され、拙著『不登校は終わらない』(2004、新曜社)の問題点をご指摘いただきました。ご指摘については、事実誤認を招きかねない表現があり、私の側にもお伝えしたいことがあります。東京シューレに同じホームページ上に私の意見を並べて掲載していただけるよう依頼しましたが、ご了承いただけなかったため、以下にこの文書に対する私のコメントを記します。

「(1) 研究方法の問題 調査方法の問題」について(P.1)

「東京シューレが明らかに研究対象とされ、本書の全般にわたって登場するにもかかわらず、当団体に何の申し入れも事実確認も無かった」(P.1 L.21)について、拙著では、団体としての東京シューレに対して、参与観察などによる一次資料の収集は行っておらず、公刊物などの二次資料に基づいて記述しました。公刊物はすべての人に開かれたものだと考え、特に許可を求めませんでした。なお、一次資料を収集させていただいた個々の情報提供者の方がたに対しては、1)調査依頼、2)ケースレポートのフィードバック、3)拙著の元となった修士論文全体のフィードバック、4)出版の是非の確認という過程を踏んでおり、それぞれの場面で削除や修正に応じてきました(- 参照)。

「都合により自分が当事者であるかどうかを使い分けている」(P.1 L.25)とのご指摘について、私は情報提供者の方がたに研究の主題を説明する上で、自分が不登校の当事者であることを語りました。同時に、拙著の中には「自分は当事者とは言えない」とする内容と読者に受け取られうる記述があったことと思います。しかしそれは、当事者というものを「何らかの本質や実態を共有する集合としてではなく、あくまでも行為者相互の関係におけるひとつの位置」(拙著、P.23)と考えているためです。「確固とした当事者が存在する」というのではなく、その人が当事者であるかどうかは、どのような状況のもとで、誰と向き合うかによって、その都度はかられるものと捉えています。

インタビューの協力者を募る手続きについては、「研究の対象にしようという意図に気づかず取材に協力した人や、まだ著者の知らないシューレ出身者達を紹介した協力者もいた」(P.1 L.25)というご指摘がありました。私は、直接知り合った方がたには主として口頭で、紹介していただいた方がたにはメールや手紙などの文書にて、研究の意図と主題をご説明し、ご了承いただいた上で調査に協力していただきました。

「フリースクールに問題があると語るように仕向けられたインタビューの発言が利用された」(P.1 L.29)について、インタビューでは誘導にならないよう気を配っていたつもりであり、フリースクールの問題点を殊更に問うような質問を投げかけることはなかったと思います。もっとも、一般的に、語りの聞き書きの場では、聞き手が誰であるかによって語られる内容は変化するものであり、私が聞き手であることがインタビューの内容に影響を与えたことは、当然ながらあったと思います。いずれの場合も、収録に当たっ

ては本人の了解を取っています。

「会話を使われるとっていない飲食の場での会話も根拠にされている」(P.1 L.30)について、インタビューが集団での飲食の場で行われたことがあることは事実ですが、その際には必ず「メモを取ってもいいか」と確認し、了解を得た上で行っており、また文章化した後で本人にフィードバックしていました。

「資料の扱い方の問題」について (P.1)

・「親の会での配布資料の中にある「親の手記」」(P.1 L.32)を「無断で引用」した事実はありません。
・一部に事実誤認として処理する情報の不足や誤りがあったことは、私の至らなさであり、大変申し訳なく思っております。ご指摘いただいた点については、重版の際に改めましたので、2刷をご覧いただければ幸いです。

「実名の扱い方の問題」(P.2)について

・東京シューレと奥地圭子さんについては、公刊物からの引用に基づいて実名を記述させていただきました。公刊物は公開された情報であり、誰に対しても引用に開かれており、それに対して私の解釈を提示しました。その解釈が、東京シューレと奥地圭子さんの名誉を損ねたとのご指摘がありましたが、私にはそうした意図は全くなく、批判的な記述も引用対象に敬意を払ったからこそ出てきたものと、読者に示すよう配慮したつもりです。

「(2) 出版までの手続きの問題」(P.2)について

・情報提供者の方がたには、1)拙著の元となった修士論文を作成する段階でケースレポートをフィードバックし、2)修士論文が完成した後は原則として論文全体をお渡ししました。なお、当該文書に記述が引用されているシューレ大学に所属する情報提供者のお二人には、直接お目にかかって一部を寄託し、お二人および関係者の方が閲覧できるようお願いしました。その上で、3)直接お目にかかるかあるいはお電話にて出版の許可をいただきました。出版後の内容はお渡しした修士論文とほぼ変わっておりません。1)~3)それぞれの過程で、情報提供者の方からのお申し出にしたいがい、記述の削除や改訂を行いました。記述の削除・改訂について、当該文書に記述が引用されている情報提供者のお二人についても、同様にいたしました。

論文作成から出版に至るまでに2ケースを削除し、ゲラ作成の段階までケースレポートの修正を受け入れました。

・出版前の修士論文の段階でのフィードバックは、団体としての東京シューレにはいたしませんでした。その理由は、 - にも示したとおり、東京シューレという団体を直接参与観察したわけではなかったためです。もっとも、情報提供者の方が所属しており私も時おり訪れていたシューレ大学のスタッフの方には、論文をお渡ししました。

「(3) 記述内容の問題」について (P.2~4)

内容の解釈については、お読みいただいた方がたの手にゆだねるほかはありませんので、弁明は差し控えます。

私には親の会やフリースクール、不登校を否定する意図はなく、不登校の子ども・若者が生きやすい社

会になるようお願いながらこの本を書きました。ただ、そのような私の「意図」とは別に、公刊物はひとり歩きして「効果」を生み出します。そのような「効果」は私の制御の範囲を超えたものであり、すべての責任を負うことは出来ませんが、可能な範囲で気をつけ、対応していこうと考えています。

なお、私が分析対象としたのは、東京シューレおよび奥地圭子さんの主張や意図そのものではなく、それらが不登校をめぐる語りの言説空間に配置されたとき、他の語りとの関係でどのように作用するかという「効果」の問題でした。すなわち、いかなる意図のもとになされたかとは独立に、東京シューレおよび奥地圭子さんの実践が、結果として「明るい不登校」「選択」の物語と受け取られてしまう言説空間があると考え、そこにおける言説間関係を問おうとしたものです。

「この本をめぐる経過」(P.5)について

.刊行後の話し合いで「多くの点で著者が誤りや不備を認める」(P.5 L.9)とありますが、事実関係の誤りや誤字脱字などについてのご指摘を受け入れ、重版時に訂正しました。また、出版前に奥地圭子さんおよび東京シューレ宛てで修士論文を直接送付していなかった点について、より丁寧なやり方がありえたことに納得しました。しかし、当該文書のご指摘を「多くの点で」「認め」ているわけではありません。

.重版時に 260 箇所あまりの修正要求(当該文書の資料参照)をいただき、検討の上、以下の箇所について 50 箇所あまりの削除・修正を行いました。1) 情報提供者個人からいただいた発言内容の削除・修正および匿名性への配慮、2) 事実誤認や誤字脱字の修正、3) より誤解を少なくする表現への改訂。いただいた修正要求のなかには、私個人の主張や解釈の大幅な改変を要請するものが含まれており、これを全面的に受け入れた場合、本の趣旨が変わってしまうと考えられたため、全てのご希望に添うことはいたしませんでした。修正作業は 2 月 16 日に終えて原稿を出版社に渡し、同日に修正作業の内容を東京シューレ宛てにご連絡しました。このときの修正リストを末尾に添付しますのでご参照ください。

.なお、当該文書に引用された手記の書き手である情報提供者のお二人についても、このときに個人としていただいた要請にしたがって、ケースレポートの一部の削除・修正を行っています。須永祐慈さんが違和感を表明しておられる「フリースクール批判にも関心を持っている」「フリースクールに一〇年以上所属し、そのなかで学び育った人物によって担われるとき、(中略) <「居場所」関係者>にとってもっとも核心を突く、手痛いものとなるに違いない」という箇所についても、このときのご希望によりすでに削除しております。2 刷本をご参照ください。

繰り返しになりますが、私には不登校運動を否定するつもりはなく、不登校を経験したひとりとして、東京シューレの実践には常に励まされ、敬意を感じてきました。実際に東京シューレに通った経験を持たない私ですが、公刊物を通して触れた東京シューレの不登校への考え方は、この文書に手記を寄せた当事者の方がお書きになっているように、私にとっても「ある意味ふるさとのような」ものであり、そうした思いは今も持ち続けています。東京シューレのますますの発展をお祈りするとともに、不登校の当事者がより生きやすい社会をめざして、ともに歩んでいけることを願っています。

以上

参考資料

- ・ 特定非営利活動法人東京シューレ 2005 「貴戸理恵著『不登校は終わらない』に対する見解」
<http://www.shure.or.jp/info/kenkai.html>
- ・ 貴戸理恵 2004 『不登校は終わらない：「選択」の物語から〈当事者〉の語りへ』新曜社

重版時の修正済みリスト(2005年2月16日)

修正の基準

修正する権利が他者にあるもの(情報提供者の発言)

修正する根拠があると貴戸が考えるもの(事実誤認、匿名性、誤字脱字など)

修正する根拠はないが、より誤解を少なくするために改変してもよいと思われるもの(表現の変更など)

修正する根拠がなく、修正できないもの(貴戸の解釈・分析に関わる箇所など)

については、個人から直接修正要求を得たものについて修正しました。

については、貴戸が判断し、適宜修正を行いました。

貴戸のまとめや分析に関わる部分はそのまま残しました。

ページ	行	原文	修正	修正理由
20	8	<当事者>の主体性を読み込んで「不登校」の用語を拒否する運動側(2)など、	<当事者>の主体性を見、「不登校」の用語を拒否する運動側の一部など(2)、	
55	8	志望どおり小学校の社会科教師となる。	志望がかなって、小学校の教師となる。	
55	15	小学校五年生	小学校三年生	
56	18	奥地主催の	奥地主宰の	
57	11	と奥地は言う。	と奥地は示唆する。	
57	13	代わっていく	変わっていく	
59	3	説得にかかる「居場所」関係者たちのしきたたかさでもある。	説得にかかるうえで、身につけざるをえなかった強靱さでもある。	
59	7	「自己負担」を関係者に強いることになった。	「自己負担」を関係者に強いることにもつながっていたように思われる。	
61	6	「否定」だと見なされ、指摘されることがなかった	「否定」だと見なされてしまうプロット上の構造が生まれた。	
61	7	暴力なども、そこでは「明るい不登校」に至る途上の受容すべきマイナスの副産物として二次的に位置づけられることになったのである	暴力などの切実な事態が、多く語られつつも、「明るい不登校」に至る途上の受容すべきマイナスの副産物として、不可避免的に二次的な位置づけをなされることになったのである。	
72	11	[奥地:二〇〇三]	削除	

74	17	「明るい不登校」を強調する～(中略)～おそらく事実だろうからである。	「明るい不登校」についての物語が、暴力や精神症状を伴う状態やひきこもりといった「明るくない不登校」を「明るい不登校」にいたる道筋として二次的に位置づける構造を有していたのは、おそらく事実だろうからである。
93	13	「家庭」を解決策として提示することの危険性	「家庭」を最終的な解決策として提示してしまう一面
94	9	「選択肢」であることも認識されるべきだろう	「選択肢」となってしまう現状があるだろう
94	18	世話人をつとめた山田	世話人をつとめる山田
97	7	「便利な」	削除
98	6	見てきた。	見てきた。粗くなることを承知で、私なりの解釈とまとめを試みたい。
107	4	フリースクール「東京シューレ」(東京都)、フリースクールA	フリースクールA(東京都K区)、またフリースクールB
130	1	情報提供もあったので東京シューレなども見学に行ったが	情報提供もあったので、都内の「居場所」を見学に行ったが
175	15	[Oさん:二〇〇二]	削除
175	18	Oさん	自らの手記の中でこのように書くOさん
176	6	そんなOさんが、「レールを踏み外した」のは中学に入ってからだった、	そんなOさんが、学校に行かなくなったのは中学に入ってからだった
176	8	と振り返る[Oさん:一九九六]。	と彼は当時の様子を綴っている。
176	13	[Oさん:二〇〇三]	削除
177	15	受験にのめり込んでいった	受験についても考えていた
177	18	[Oさん:二〇〇三]。	とOさんは書く、
178	6	失望を決定的にしたのは、	失望を象徴しているのは、
178	12	遠ざけ、できたガールフレンドは有名国立大学の大学院生だった。	遠ざけた。
179	3	ガールフレンドに～(中略)～通うようになった	削除、改行
179	4	外では～(中略)～発散した	外では「いいやつ」を演じて感情を押し殺している一方で、家にいるときは自暴自棄的になることもあった。
180	5	「狭く、汚く、いまいち何やってるかわからない。でも何かできそうな気がした。」	「小さい場所だし、できたばかりで混沌としてる。でも何かできそうな気がした。」
180	11	なっていった。	なっていった。大学で書いた手記には次のような記述が見られる。

181	3	[Oさん:二〇〇二]	削除	
190	8	果たしてきた	果たすようになった	
190	14	シュールにいても新しい刺激が感じられなくなり、退会した。	新しい刺激を求めるようになりシュールを退会することにした。	
191	1	大学の「学問」	一般大学の学問	
191	2	「不登校研究会」を組織し、	「不登校研究会」に参加し、	
191	4	「大学」においても	シュール大学においても	
191	5	「学問」	学問	
194-5	8	それとともに～存在していることも確かだ。	*長文のため末尾参照(A)	
212	18	/	.	
218	10	学歴社会に亀裂を呼び込むことを意図していた。	学歴社会の価値観を相対化するものとなっていた。	
230	13	一方では、東京シュール出身の「不登校エリート」たち	一方で、フリースクール出身の「不登校エリート」たち	
232	17	表裏一体	両立可能	
232	18	一貫性を欠いていることを逆照射する	一貫性に固執していないことを示す	
233	1	不向きな用語なのだ	不向きな用語なのかもしれない	
236	9	フリースクールが直面する今日的な状況	「居場所」が直面する今日的な状況の一端	
245	5,6	フリースクールA	フリースクールB	
250	17	世話人をつとめた山田	世話人をつとめる山田	
263	6	このことは～(中略)～存在しているのである。	*長文のため末尾参照(B)	
265	9	主体的に「選択」させるという問題	「選択」させかねないという問題	
265	16	階層格差の現実、いわば自己責任のリスクとして不可視化されることになる	階層格差という現実のひとつの局面は、いわば自己責任のリスクとして不可視化されてしまうおそれがある。	
282	15	チョ・ヘジョン	チョ・ハン・ヘジョン	
291	21	とする意向があるという。	とする意向があるという説もある。ただし、これは「登校拒否を考える会」の公式な見解ではない。	
292	10	元	削除	
320	14	Oさん手記3本	削除	

* 長文の修正

(A)	<p>以上が、一五人のもと不登校者たちの語りである。不登校といっても彼ら・彼女らの経験はさまざまであり、不登校の<当事者>を一様なものとして扱うことはできない。このような多様性を考えれば、「不登校の<当事者>」とひと括りに名指すことが、そもそも困難なことだとも言える。けれども、そこには不登校経験を持つゆえに直面する問題や、<当事者>であるがゆえに身につけざるをえない戦略、流し込まれる考えの道筋などが、存在していることもまた確かだ。一九八〇年代後半以降に不登校となった彼ら・彼女らは、「学校に行ってもよいし、行かなくてもよい」とする「選択」の物語の影響を、何らかのかたちで受けている場合が多い。<親>や<居場所>関係者>を通じてもたらされる不登校に「肯定」的な物語は、不登校の状態にある子どもたちを直接的・間接的に「楽」にした。そして、彼ら・彼女らが大人になったとき、その物語は役割を終えて、本人にとっての重要性を減少させていったり、そのあらすじとは異なった現実感を、他の言葉で語ることに開かれるようになっていく。今、そうした経験を持つ人びとのなかから、不登校に「肯定」的な物語をめぐる新しい語りが生み出されつつある。例えば、フリースクールのなかから、不登校やオルタナティブ教育の研究者が育とうとしている。フリースクールや「選択」の物語に対する問題提起が、フリースクールに一〇年以上所属し、そのなかで学び育った人物によって担われるとき、それは「学校を否定している」「医療を否定している」といった、これまで外部から寄せられ続けた表層的な批判ではなく、<居場所>関係者>にとって極めて重要な、新たな問題を浮上させることになるだろう。そうした人物を輩出していくことは、「選択」の物語を彼ら・彼女らにもたらした<居場所>関係者>や<親>の、ひとつの到達点だとも言えるのではないだろうか。</p>
(B)	<p>このことは、不登校を「肯定」するための主要な回路が、「選択」の物語のみになってしまっている現実の不十分さを示している。「選択」の物語は、「学校に行く人」と「行かない人」をともに肯定する点で、どちらかと言えば<親>や<「居場所」関係者>の立場に依拠した物語である。この物語が、不登校に苦しむ<親>と子どもを救ったのは確かなことである。けれども、「不登校によるマイナス」を引き受けながらみずからの不登校経験と向き合う<当事者>にとって、不登校を「肯定」するための言葉は「選択」の物語とは別のものになるだろう。</p>